竹田城跡 発掘調査　現地説明会資料

平成19年9月8日(土)
朝 来 市 教 育 委 員 会

１、はじめに

平成 18 年度から行っている竹田城跡の調査は２年目になります。市教育委員会では、竹田城の居館跡についての資料を収集し、国史跡の指定範囲拡大に向けての基礎データを得るため、文化庁の国庫補助を受けて発掘調査を実施しています。

２、調査の成果

今回は、Ｌ字状の試掘トレンチを１本設定して調査を行いました。

その結果、トレンチ全体にわたって遺構を確認することができました。

【石垣遺構】トレンチの南側で見つかったものです。約 1.5m×約 0.8mの巨大な石を角に置き、そこから「コ」の字状に石垣が積まれていました。この石垣は建物を区画する施設と考えられます。石垣の前面には多くの石が転落しており、その間からは、中国・明時代の染付磁器や唐津焼の碗、瀬戸・美濃焼の天目茶碗、備前焼の擂鉢など 16 世紀後半と思われる陶磁器が出土しています。基底部に大きめの石を使っていることや出土した陶磁器の年代から、石垣がつくられた年代は 16 世紀後半～17 世紀ではないかと考えています。

【土坑】一辺が 0.8～0.9mで、約 4mの間隔で並ぶ土坑を確認しました。これは、昨年度の調査で確認されていたものと同じものです。土坑の大きさや、その間隔の広さから建物に伴う遺構とは考えづらく、性格は不明です。遺物は出土していますが、時期を明確に特定できるものは含まれていません。

【製錬に伴う遺構】トレンチの中央あたりで、製錬に伴う遺構を確認しました。地面が熱を受けてにぶい赤褐色に変色しています。付近からはスラグ（鉱滓、ノロ）が出土しています。また少し離れたところからは、炭混じりの土が広がっている箇所も確認できました。昨年度の調査でも、スラグは出土していて、この周辺で小規模の鍛冶が行われていたと言えます。

【暗渠】トレンチのやや南寄りで、トレンチに直交して確認したものです。確認した面が、他の遺構よりも上にあることや、含まれている瓦や陶磁器の時期が新しいことから、明治時代以降につくられたと考えています。

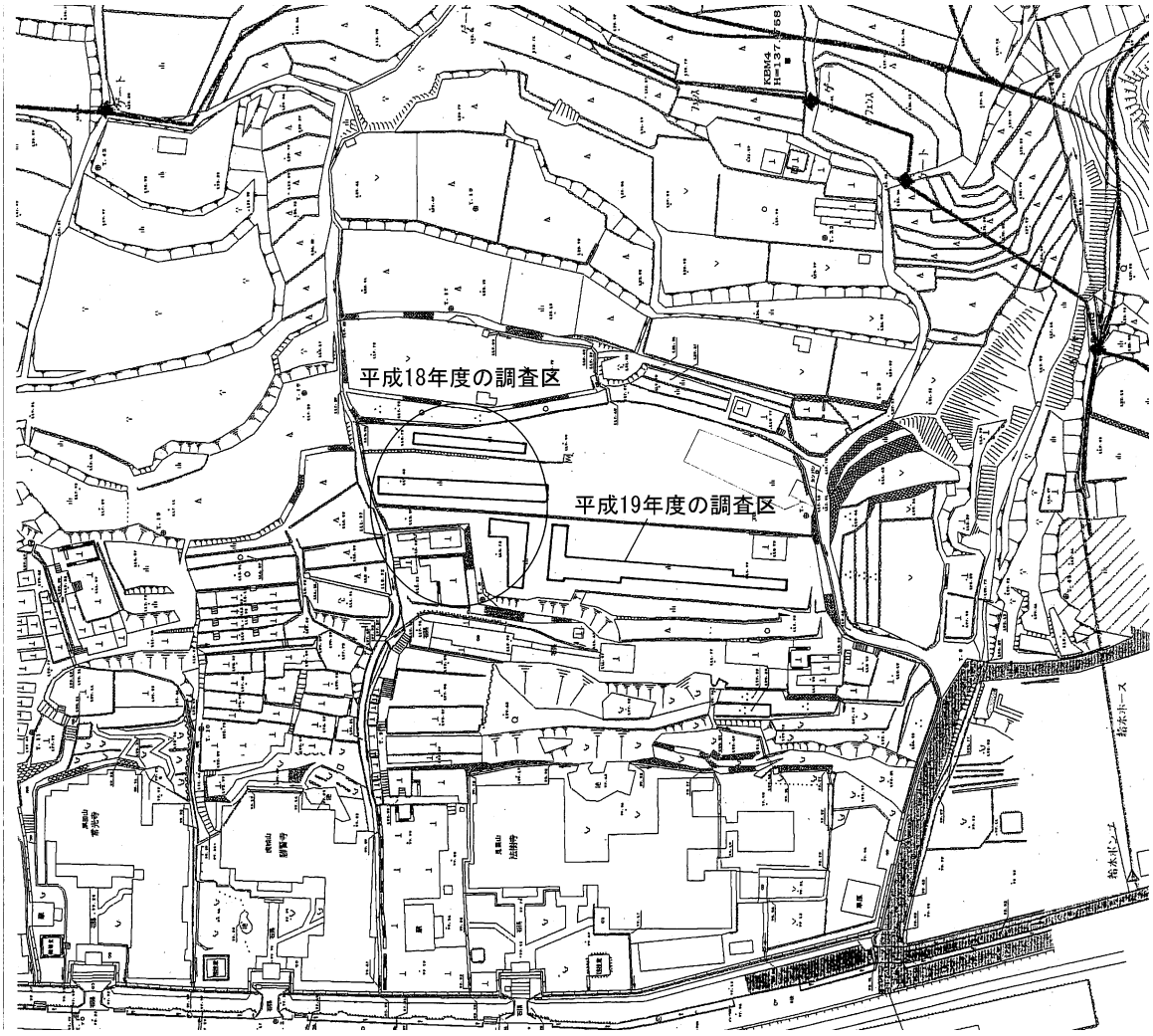
【その他】他に、溝やピット、不定形の落ち込みなどを確認しています。また、出土した陶磁器の中には中国から輸入された染付磁器や、16 世紀後半～17 世紀の瀬戸・美濃焼の皿、土師器の皿などが出土しています。

３、まとめ

以上のように今回の調査では、新たに石垣遺構を検出することができました。

性格については今後更なる検討が必要ですが、建物を区画するものと考えられ、貴重な発見となりました。出土した土器は昨年度の調査に比べると多くありませんが、貴重な資料がいくつか含まれています。

今後はさらに検討を重ね、遺構や出土遺物から、今回の発掘調査地が竹田城跡の中でどういう位置づけになるのかについて考えていきたいと思っています。



確認した遺構のようす